

旧門司駅舎跡の発掘調査成果

—古代～近世門司港の片鱗と初代門司駅・近代門司港の形成—

1. はじめに

旧門司駅舎跡は、門司区清滝^{きよたき}に所在し、JR 門司港駅と九州鉄道記念館の間に位置しています (第 1 図)。発掘調査では、明治 24 (1891) 年に開業した九州鉄道初代門司駅の機関車庫・倉庫・石炭滓^{せきたんかす}の廃棄穴^{はいきあな}・初代駅舎外郭石垣^{がいかくしがき}・初代駅舎の新築建物や、大正 3 (1914) 年に竣工した 2 代目門司駅 (JR 門司港駅) 時代の築堤石垣^{ちくてい}・倉庫石垣の他、近世門司港の旧海岸線^{きゆうかいがんせん}やそこに築かれた護岸石垣^{ごがん}、大正～平成時代までの遺構を確認しました (第 8 図)。

2. 旧海岸線の護岸石垣と古代・中世の遺物

調査区の東西方向に向かって埋立前の旧海岸線と門司築港前の護岸石垣が確認されました (第 2 図)。この石垣は、みやこ町所蔵の「小笠原文庫」に所収される「門司築港計画二千分之図」に描かれている「岸垣」であると考えられます。土層観察から、石垣の前面には泥が堆積しており、その上に築港・駅建設時の埋立土を被せていることが分かりました。この泥層からは古墳・平安・鎌倉・江戸時代の遺物が出土しており、明治時代以前の門司港の歴史的な変遷の片鱗を垣間見ることができます (第 7 図)。

3. 初代門司駅の機関車庫とその基礎構造

機関車庫は、煉瓦^{れんが}をイギリス積みで構築したもので、旧海岸線を跨いで基盤層 (地山) と門司築港による埋立地の両方に構築されていることが分かりました。

地山上に基礎が構築されている部分では、基礎を設置するための溝を掘削し、強固な基盤層を型枠替わり^{かたわく}にして直接コンクリートを打設する構造であること、埋立地側 (旧低地) では、丸太を使用した胴木 (江戸時代の石垣構築に用いられる地盤沈下を防ぐ技術) を設置し、その上に型枠を乗せ、コンクリートを流し込む構造であることが分かりました。また、埋立土によって基礎が埋まっていること、旧海岸線を境に基礎構造が変化することが確認されたことから、港と駅が同時に構築されたことが判明しました。

九州鉄道が開通した明治 22～24 年代は、江戸と明治の本当の変わり目のような時期であり、それは機関車庫の基礎に現れた近世的な「胴木」と、近代的な「コンクリートと煉瓦」の共存が示している通りです。機関車庫の基礎構造は、伝統的技術と西洋技術を折衷・受容した上で成立したことを示しており、異なる地質に見事に対応した技術力を含めて、明治 20 年代の土木技術を理解する上で重要な遺構であると言えます。なお、文献史料から、この機関車庫を建設した会社が間組であることが分かりました。

4. 初代門司駅本屋の外郭石垣と大正時代の倉庫石垣

調査区の東端に L 字に角をもつ間知石を使用した大正時



第 1 図 旧門司駅舎跡の位置と開発範囲



第 2 図 旧海岸線に築かれた護岸石垣と機関車庫



第 3 図 機関車庫の全景 (右が北)
旧海岸線を境に基礎構造が変化する



第 4 図 機関車庫の陸地側基礎 (直接コンクリート)

代の倉庫石垣が確認されました。この石垣の下部から平面が一回り大きな初代門司駅本屋の外郭石垣が確認されました。この部分は明治30年の構内図に「出口」と記されている部分と推定されます(第6図)。初代駅舎の外郭石垣隅はアールを取っており、明治時代の駅に相応しい様相となっています。これと比較して、大正期の倉庫石垣は隅が直角で、石垣の傾斜はホーム仕様の垂直に作られています。

5. 大正3(1914)年～平成までの遺構

調査では、2代目門司駅が竣工した大正3年から調査前の駐車場になるまでの遺構が確認されています。大正時代の遺構は、初代駅舎跡地に建設された倉庫石垣や築堤石垣などで、これらは石炭滓を使用して整地されていました。また、昭和初期と推定される鉄管や、貨物ホームの石垣の他、昭和後期から平成前半頃までの側溝など、2代目門司駅(門司港駅)の時代から現在までを繋ぐ歴史的痕跡が確認されました。

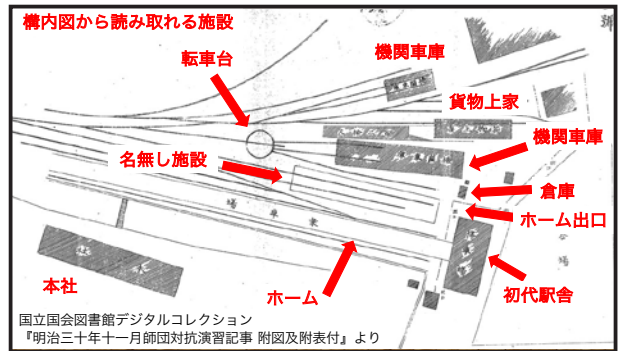
6. おわりに - 「門司港らしさ/レトロ」の源泉 -

調査によって、門司港は駅と港が直結して形成された近代都市であったということが分かりました。そして、煉瓦で構築された機関車庫は、門司港という街が「港湾都市」であると同時に「鉄道都市」であったことを、消えゆく門司港の煉瓦建造物と共に現在に伝えるものであり、これらは門司港の新たな歴史的価値を生み出す可能性を秘めていると筆者は考えます。

史上初めて門司港の発掘調査を行い、多くの成果が得られました。調査区の周囲には各時代の遺構が残っている可能性が高く、出土遺構を含めて、門司港という街そのものを「遺跡」として見る必要があるでしょう。



第5図 機関車庫の低地側基礎(胴木組)



第6図 明治30(1897)年の初代門司駅構内図



第7図 門司駅の遺物と古墳～鎌倉時代の遺物



第8図 旧門司駅舎跡 全景写真(右が北..上が門司港駅方面)

埋蔵文化財調査室では、令和6年3月に8冊の発掘調査報告書と年報40、研究紀要38を刊行致しました。また、最新の発掘情報やイベント情報はホームページで公開していますので、是非ご覧下さい。

埋蔵文化財通信